

---

# 月夜の日

K I D

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月夜の日

### 【Nコード】

N9564I

### 【作者名】

KID

### 【あらすじ】

4月1日エイプリル・フル午後12時過ぎ。今から1年前を境に、アイツは俺の前から、姿を消した……。映画の情報を聞いて、何となく思いついた短編です。内容はコナン寄りですが、一応コナン&キッドにしたつもりです。

(前書き)

何となく思いついた作品ですが、今まで以上に短編の文章が長くな  
った気がします・・・。

怪盗4月1日 午後12時過ぎ。

杯戸シティホテル 屋上。

この日、俺はある場所にやってきていた。

そこは初めて、俺がアイツに出会った場所でもあり、最後に会う事になった場所でもある。

いや……。

正確に言えば、その日が最後になるだなんて、俺は思ってもみなかった。

また敵同士『泥棒』と『探偵』の追い駆けっこゲームが出来ると、そう思っていたから……。

でもそれは、向こうも同じだったと思う。

でなければ、アイツがあんな事を言うわけがないのだから……。

1年前……。

俺はいつものように、アイツが獲物を盗んで逃げたのを確かめてから、この屋上に上った。

何故『盗んでから』なのかと言うと、そっちの方が、相手はかなり油断するからである。

そうして何とか屋上に気付かれぬように上がり、俺は満月を見つめながら背中を向けていたアイツに、声を掛けた。

『黄昏てるとやられるぜ？ コソ泥さん』  
いつものように軽く声を掛けた俺だったが、その日に限っては、何かが違った。

何故かアイツはしばらくの間、一切口を開こうとせず、こちらに背を向けたまま、身動き一つしないのである。

『おい・・・、キッド？ どうした？』

俺が心配して声を掛けてみると、ようやくアイツは、背中を向けたままではあったが、口を開いた。

『綺麗ですね・・・。ですが・・・、この満月の光をこの姿で浴びる事は、もう私にはないのかもしれないかもしれません・・・』

重い口を開いたアイツの言葉に、俺は少しだけ・・・、本の少しだけ驚いた。

と同時に、一瞬何の冗談なのかとも思う。

『おいおい・・・。何言ってるんだよ・・・。それじゃあまるで「もう二度とお前に会えない」みたいな言い方じゃねーか・・・。本当に今日はどうしたんだよ？』

俺はこの時、半分笑いながら返事を返した事を、今はかなり後悔している。

アイツはたぶん・・・。

自分の辛い気持ちを押し殺しながら、あの場で俺に告げたはずなのに・・・。

そんなこんなで、全くアイツの発言を信じなかった俺だったが、その後は徐々に、向こうが本気で言ってきているのだと気が付き始めた。

『名探偵……。今日の追い駆けっこは中止……。いいえ……。終わりです。永遠に……。』

『えっ……。？ なっ……。！？ どういう意味だよ、キッド！俺から逃げる気なのか！？』

半分イラ立ちながら俺が怒鳴ると、アイツはそっと、俺の方に体を向けた。

だが、満月による逆光と、白いシルクハットをいつもよりも深く被っているせいで、顔まではよく見えない。

そんな姿のまま、アイツは再び重い口を開いた。

『いいえ……。私は逃げるものではありません。ただ……。あなたにだけは「お別れ」を言いたかっただけです……。』

『お……。お別れ……。？』

俺は、全くその言葉の意味が分からなかった。

『お別れ』とは、一体どういう意味だ？

まさか、警察に自分の正体がバレたのか？

いや……。

おそらくそれはない……。

今日の中森警部の態度から考えると、とても正体がバレてしまったとは思えない……。

じゃあ……。どうして……？

『単純な事ですよ、名探偵……。ただ単に、私が怪盗になる理由がなくなっただんです……。』

『怪盗になる……。理由……。？』

『ええ……。だから私は今日から、この月夜の空からも、警察か

「らも、そして……。名探偵の前からも消えます」  
「!?!」

俺は、耳を疑った。

「アイツが……」

「キッドが……」

「怪盗を辞める……?」

それは俺自身の中でも、全く想像の出来ない事だった。

あんなに派手に、大胆不敵に、華麗に宝石を盗んでいたキザなコソ泥が、今日からいなくなる……?

園子やキッドのフアンの人達は勿論悲しむだろうが、なんで急にそんな事を言うんだ……?

それも、ライバル探偵でもある白馬や、キッド担当の中森警部ではなく、俺に……。

俺だけに……。

「なんで……。なんで俺なんか……? なんで俺なんか、急にそんな事言うんだよ!? それに……。俺は散々、お前に言っただだろ!?」「いつか必ず、お前の正体を暴いてやる」って!」  
俺がアイツにそう叫ぶと、アイツは顔を下に向けたまま、小さな声で言った。

「私だって……。今日が最後になるだなんて、思ってもみませんでしたよ……。でも……。どうやら最後になってしまったようです……」

「もしかして……。お前がキッドとして動いていたのには、何か他に目的があったのか?」

「……ええ……。あなたにはこちらの事情上、教える事は出来

ませんが・・・』

アイツがそう答えたのを最後に、その場ではしほしの沈黙が続いた。お互い何から言ったらいいのかが分からず、今まで以上の間が空いてしまったのである。

それからさらにしばらく経った頃、先に口を開いたのは、やはりアイツの方だった。

『名探偵・・・。私は最後に、あなたに謝らなければいけませんね。』

・・・』

『えっ・・・？ 謝るって・・・、何を・・・？』

『私と初めて、ここで出会った時に言った言葉の事ですよ・・・』  
それを聞いて、俺もあの日の記憶を思い出す。

怪盗はあざやかに獲物を盗み出す創造的な芸術家だが・・・。探偵はその跡を見て難クセつける、ただの評論家に過ぎねーんだぜ！

『あの言葉・・・、あなたの中で取り消してください。あなたとゲームをしている内に、分かったんです・・・。あなたはただの「批評」だけをする安い探偵ではなく、自分で信じた「道」と「真実」を見つめ続ける探偵だとね・・・』

『・・・キッド・・・』

それを聞いた俺は、咄嗟に思った。

「それを言ったら、お前もただの『芸術家』なんかじゃない！」と・・・。

ただ宝石や獲物を盗む事の他に、人も助ければ、他人の殺人を止められず、それに対して悔しがる・・・。

普通の怪盗や泥棒が全く持っていないような……。  
むしろ、怪盗として動く上で必要のないようなものを、お前は持っている……。

果たしてキッド自身は、それに気付いているのだろうか……。

とその時、突然キッドの後ろの辺りが、先程よりもかなり明るく光りだした。

それと同時に、何かのエンジン音が夜空に鳴り響く。

二人はすぐに、それが中森警部達の乗っていたヘリコプターの音だと気が付いた。

『待てえ〜！！ キッドオ〜！！ 今回は絶対に逃がさんぞお〜！』

何も知らない中森警部の、いつもの叫び声がところ構わず辺りに響き渡ったが、それは、アイツとの最後の対面の終わりを意味していた。

『どつやら……。この音はお別れの合図のようですね……。名探偵……。』

そう悲しそうな笑みを浮かべて呟くアイツを、俺は無言で見つめた。

と同時に、俺はアイツの後ろからやってくるヘリ達に対して、強く願う。

どうか……。こつちには来ないでくれ……！

俺はまだ……。コイツに訊きたい事が山ほどある。

それに……。

それに俺は、まだコイツと……。

『さようなら、名探偵……。短い間でしたけど、楽しかったですよ……』

『キッド!!』

俺がそう叫んだのと同時に、アイツは夜空にいつもの白い翼を広げ、へりの間をすり抜けて飛び去った。

その最後の姿を、俺は屋上のフェンスに両手を掛けながら見つめる。

最後に見えたアイツの顔は、もうこの先、忘れる事は出来ないだろう……。

飛び去る直前のアイツの顔は、目の半分が真っ赤に流血し、モノクルの掛けてある方の目からは、一筋の涙が流れていた。

その姿を思い出すと、何故か急に、俺自身の鼻と目の辺りが、徐々に熱くなってくるのを今も感じる。

俺も実際、あの話を聞いた時の事を言えば、寂しかった……。

『もう二度と、アイツには会えない』という事が……。

もしかしたら、俺とアイツはいつの間にか『探偵』と『泥棒』という敵同士ではなくて『友情』というもので繋がってしまったのかもしれない……。

だからアイツが飛び去る時、俺は捕まえようとしなかったのかもしれない……。

今は、何となくそんな感じがする。

あれから1年……。

俺は逆戻りの小学二年生になっていた。  
だが、未だに肝心の組織は見つからないし、愛すべき人には本当の事を話せずにいる。  
時々元の体には戻ったが、すぐにガキの姿に逆戻り……。  
結局あれから、何の進歩もしていなかった。

そして最初に言った通り、アイツはあの日以来姿を消したままだ。  
もはや町中に行ってみても『キッド』という単語は、全く聞かなくなつた。  
確実にアイツの存在は、周りから再び忘れ去られようとしていたのである。

「やっぱり……。来るわけないか……」  
俺が今日ここに來ていた訳は、おっちゃんが事件の捜査で泊まっていたから……。  
でなければ、こんなところに来れるわけがない。  
俺はアイツの事を思い出しながら、泊まっていた部屋に戻つた。

翌朝。

朝早くに起きた俺は、すぐに本屋へと足を運び、早速新作の小説を手を取つた。

今日は楽しみにしていた小説の発売日。  
俺の予感が当たっていれば、今日はホテルでじっくりと小説が読めるはずだ。

そう思うと早く中が読みたくなって、俺はホテルに帰る道を猛スピードで走り出した。

と、その時。

ドンッ！

「うわっ！」

「おわっ！」

ドシャッ！

突然角を曲がったところで、俺は誰かに正面からぶつかった。

その衝撃で互いに尻餅は着くわ、小説は落とすわ……。

「痛ってー……」

「痛たたた……。あつ！ おい、ボウズ！ 大丈夫か！？」

そう尋ねると、ぶつかった相手は俺に対して、親切に手を差し伸べた。

とりあえず、俺は頷きながらその手を掴んで立ち上がる。

「ごめんなさい……。あんまり周り見てなかったから……」

「いいって。いいって。俺もよそ見してたし……。自業自得！」

ぶつかった相手はそう笑いながら言うと、俺の落とした小説を手に取りった。

ふっと、そのぶつかった相手の顔を見て、俺は一瞬その場で固まる。ぶつかった相手の顔は、素顔の俺とよく似た顔付きの青年だったのだ。

もしかしたら、今の蘭や服部と同年くらいなのだろうか・・・。

(そっくりだ・・・！)

と、俺がそんな事を思っていると、青年は小説を俺の方に差し出した。

「これ。落としたぜ？」

「えっ？ あっ、ありがとう・・・」

俺がその小説を受け取った、その時。

パチンツ！

ポンツ！

青年は俺の顔の前で指を鳴らすと、突然青年の手の中から真っ赤なバラの花束を出す。

そんな突然の出来事に驚いていると、その青年は俺に対して、アイツと同じような笑みと、アイツと同じような口調で言った・・・。

「久しぶりだな、名探偵・・・」

(後書き)

どーも KIDDでーす！

今回は3回目の短編で、明るくも暗くもなく(?)と言った感じですよ。

この作品を思いついたのは、来年のコナン映画がキッドだったから・・・。  
だから自然に思いついたと言うか・・・、なんと言うか・・・。

この後コナンがどんな行動を取ったのかは、読者の皆様にお任せします。

(自分でも色々と思い付いてしまって・・・)

そう言えば最近気が付いた事なんですが、怪盗キッドが出ているコナン映画(鎮魂歌は除きますけど)全部公開日が、4月17日なんですわね！

何か意味があるんでしょうか・・・？

それでは、失礼しまーす 三

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9564i/>

---

月夜の日

2011年11月11日23時43分発行